

## 大学進学に伴う都道府県内移動の考察（その3） —神戸大学の研究（その8）—

A Study on Migration to University within Prefecture(III): A Case of Kobe University(VIII)

山内 乾史（神戸大学 大学教育推進機構 教授）

### 要旨

本研究は、兵庫県内からの神戸大学合格者数を事例に、都道府県間移動ではなく、都道府県内移動に焦点を当てて研究を行うものである。具体的には、但馬地区ないし東西播磨地区からの神戸大学合格者が減少しているのではないかという教員としての実感をベースに、どの地域からの合格者がどの程度減少しているのかという実態を明らかにし、その理由を考察しようとするものである。その第一弾として、前々稿では新しい第5学区（但馬学区）からの神戸大学合格者の増減を学校別に他大学と比較しながら論じた。その結果、神戸大学への合格者数が減少傾向であることが明らかになった。この傾向が、第5学区に特有のものであるのか、あるいは他の学区にも見られる傾向であるのかを検討するため、前稿では新しい第3学区（播磨東）、第4学区（播磨西）からの神戸大学合格者数の推移を扱ったが、特に第3学区からの合格者数が減少していることが明らかになった。最終回の今回は第1学区と第2学区について検討し、総合的な考察を行う。

### 1. はじめに（補足）

最初に前稿での結果に1991年度の合格者数（ただし岡山大学については1991年度と1996年度が不明）も加えた表6によって、第3学区、第4学区、第5学区の合格状況について補足しておく。

この表によると、第5学区からの岡山大学合格者数は2004年度から2016年度にかけて12名から16名に増加している。もちろん、第5学区からの神戸大学への合格者数もこの期間微増している。この両大学の増加分が2004年度を基本とすると33.3%と同一である。

したがって、第5学区に限定すれば、神戸大学への合格者数の増減に対して岡山大学への合格者数の増減が、顕著な影響を及ぼしているとは言えないように見える。この点を第5学区ほどは神戸大学と離れていないが、やはりかなり離れている第4学区、また神戸市に隣接する明石市までを含む第3学区と比較検討すると、第3学区においては神戸大学合格者数の減少と一対を成すことがわかる。

繰り返しになるが、筆者は教員の一人として但馬地区、播州地区からの進学者が漸減しているのではないかという実感を強く有する。つまり、兵庫県内の、神戸大学からみた遠隔地から合格者が減っているのではないのかということである。この実感をデータの上

でも確認できるのかどうかを検討するのが本研究の目的であるが、今回はおひぎ元中のおひぎ元である第1学区(神戸・芦屋・淡路)と第2学区(阪神・丹波)の推移を検討する。

なお、前稿までは、各学区の高校別に検討を進めてきたが、本稿では第1学区、第2学区ともに高校数が大変多いので、学区単位で記載する。

表6 第3学区～第5学区からの各大学合格者数(1991～2016)(1991年度を追加)

学区	在校生数	神戸大学				東京大学				京都大学			
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991
5区	4885	8	6	13	6	1	4	0	0	3	2	2	4
4区	23410	83	69	88	110	10	11	17	22	32	35	54	39
3区	26631	81	100	119	98	21	44	39	36	30	67	43	49

  

学区	在校生数	大阪大学				名古屋大学				広島大学				岡山大学	
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004
5区	4885	10	12	11	5	2	1	3	2	10	3	5	4	16	12
4区	23410	61	58	80	53	2	8	15	13	37	35	63	57	125	97
3区	26631	71	80	78	75	9	7	6	6	31	37	42	59	100	80

出典:『大学入試全記録(サンデー毎日特別増刊)』の1991年度版、1996年度版および『完全版 高校の実力(サンデー毎日特別増刊)』の2004年度版、2016年度版のデータに基づき筆者作成。本文参照のこと。

## 2. 第2「阪神・丹波」学区からの合格状況の分析

まず、第2学区について検討しよう。第2学区は中核市である尼崎市や西宮市、宝塚市等を中心とする学区である。従来の西宮学区、伊丹学区、宝塚学区、尼崎学区と丹有学区が統合され、新たな第2学区が誕生した。この新しい第2学区は第1学区と並び裕福な層が比較的多く、教育熱心な中流層が多く共住していると考えられる。そのため、甲陽学院高校のような全国有数の進学実績を有する私立高校も多い。

ただし、大阪府と隣接するので、在阪の大学に進学する生徒も多くいることには留意が必要であり、本学にとっても他人事などではない。

さて、第2学区には公立高校39校と私立高校14校が含まれる。公立高校39校の内訳は県立高校34校、尼崎市立高校2校、西宮市立高校2校、伊丹市立高校1校である。

表7を見ると、1991年度→1996年度→2004年度→2016年度の順に、東京大学32名→28名→24名→33名、京都大学114名→116名→89名→83名、大阪大学121名→102名→119名→161名、名古屋大学7名→11名→9名→7名、広島大学33名→22名→18名→42名となっている。2004年度から2016年度にかけて全体としては増加傾向にあるといえよう。岡山大学の合格者数に関しても、2004年度31名→2016年度45名と増加している。

それに対して神戸大学への合格者数は131名→157名→150名→161名と増減しており、明瞭な傾向は観察されない。すなわち、第4学区、第5学区と同様に1996年度から2004

年度にかけて合格者数が落ち込み、2016年度に再び増加するという傾向がみられるのである。2003年度から神戸商船大学と統合し、入学定員が増加したことを加味すると、合格者数の増減傾向は好ましいものとは決して言えない。

表7 第2「阪神・丹波」学区からの各大学合格者数（1991～2016）

在校生数		神戸大学				東京大学				京都大学			
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991
合計	42986	161	150	157	131	33	24	28	32	83	89	116	114
大阪大学				名古屋大学				広島大学				岡山大学	
2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004
161	119	102	121	7	9	11	7	42	18	22	33	45	31

出典：表6に同じ。

### 3. 第1「神戸・芦屋・淡路」学区からの合格状況の分析

次に第1学区からの合格状況を検討しよう。第1学区は従来の神戸第一・芦屋学区、神戸第二学区、神戸第三学区、淡路学区を統合してできた学区である。第1学区は政令指定都市で県庁所在地でもある神戸市を含む学区であり、人口も多い。第2学区と並んで、この地域から神戸大学への通学者数が最も多いことが予測される。毎年、東京大学合格者数の高校別ランキングにおいて上位に顔を出す灘高校もこの学区に所在している。また本学に多くの卒業生を送り込み続けている長田高校と神戸高校が所在している。

第1学区には国立の中等教育学校＝神戸大学附属中等教育学校1校、公立高校32校、私立高校29校が含まれる。公立高校の内訳は県立27校、神戸市立高校5校である。県立高校には芦屋国際中等教育学校が含まれる。

表8を見ると、1991年度→1996年度→2004年度→2016年度の順に、東京大学114名→122名→111名→119名、京都大学140名→149名→156名→163名、大阪大学137名→166名→179名→200名、名古屋大学11名→17名→9名→14名、広島大学60名→67名→35名→46名となっている。東京大学は横ばい、京都大学は微増、大阪大学は増加、名古屋大学と広島大学は増減を繰り返している。神戸大学においても、やはり212名→271名→225名→270名と増減を繰り返し、傾向がはっきりしない。それに対して岡山大学は第3学区と同様に2004年度から2016年度にかけて52名→101名と大幅に増加している。この原因の解明が本学にとってはぜひとも必要ではないだろうか。もしこれが事実であるとすれば、前節でも述べたように、神戸大学の入学定員は1996年から2016年にかけて増加しているわけであるから、この傾向が望ましいものではないことは明らかである（後掲の表10を参照のこと）。

表 8 第 1「神戸・芦屋・淡路」学区からの各大学合格者数 (1991～2016)

在校生数	神戸大学				東京大学				京都大学					
	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991		
合計	51549	270	225	271	212	119	111	122	114	163	156	149	140	
	大阪大学				名古屋大学				広島大学				岡山大学	
	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004
	200	179	166	137	14	9	17	11	46	35	67	60	101	52

出典：表 6 に同じ。

#### 4. 総括

以上、前々稿、前稿と本稿の結果を表 9 にまとめた。第 1 学区、第 2 学区、第 3 学区、第 4 学区、第 5 学区を比較していずれの学区においても、岡山大学への合格者数が 2004 年度から 2016 年度にかけて増加している。他方で、これら 5 つの学区を合わせた神戸大学への合格者数は、557 名 (1991 年度) →648 名 (1996 年度) →550 名 (2004 年度) →603 名 (2016 年度) と伸び悩む傾向が顕著である。東京大学においては 204 名→206 名→194 名→184 名、京都大学においては 346 名→364 名→349 名→311 名、大阪大学においては 391 名→271 名→448 名→503 名、名古屋大学 39 名→52 名→34 名→34 名、広島大学 213 名→203 名→128 名→166 名となっており、大阪大学以外は増減傾向がはっきりしないが、大阪大学への合格者数は激増している。岡山大学のみ 2 時点だが、2004 年度 278 名に対し、2016 年度は 387 名と大幅に増加している。

つまり、筆者の予想に反して、神戸大学の合格者数は、第 4 学区と第 5 学区からの合格者数は、全体としては漸減傾向にあるように見えるものの増減の傾向がはっきりしないのに対し、第 3 学区からの合格者数は大きく減少し続けているのである。

岡山大学全体の合格者数自体は 2004 年度で 2102 名、2016 年度で 2381 名と 13.2%増加しているが、第 3 学区から第 5 学区の合格者数は 27.5%増加している。神戸大学の地元としての第 3 学区の進学動向として、この要因の分析が必要なのではないのか？見ようによっては、神戸大学から「兵庫県全体の国立大学」という性格が薄れ、「神戸市・阪神間の大学」という性格がより強まっているのではないかと推測される。つまりより一層のローカル化が進んでいるのではないかということである。また第 1 学区と第 2 学区において、特に第 2 学区においては大阪大学への合格者数が急増している。第 1 学区と第 3 学区では岡山大学、第 1 学区と第 2 学区では大阪大学と隣接する府県の大学への合格者数が増加していることは、神戸大学における高大連携、高大接続戦略・戦術の見直しが必要であるということを示唆するものに他ならない。ことに第 1 学区は岡山大学への合格者数も大阪大学への合格者数も両方増加している。

表9 兵庫県各県立高校学区からの各大学への合格者数（1991～2016）

学区	在校生数	神戸大学				東京大学				京都大学			
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991
第1区	51549	270	225	271	212	119	111	122	114	163	156	149	140
第2区	42986	161	150	157	131	33	24	28	32	83	89	116	114
第3区	26631	81	100	119	98	21	44	39	36	30	67	43	49
第4区	23410	83	69	88	110	10	11	17	22	32	35	54	39
第5区	4885	8	6	13	6	1	4	0	0	3	2	2	4
合計	149461	603	550	648	557	184	194	206	204	311	349	364	346

  

学区	在校生数	大阪大学				名古屋大学				広島大学				岡山大学	
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004
第1区	51549	200	179	166	137	14	9	17	11	46	35	67	60	101	52
第2区	42986	161	119	102	121	7	9	11	7	42	18	22	33	45	31
第3区	26631	71	80	78	75	9	7	6	6	31	37	42	59	100	80
第4区	23410	61	58	80	53	2	8	15	13	37	35	63	57	125	97
第5区	4885	10	12	11	5	2	1	3	2	10	3	9	4	16	12
合計	149461	503	448	437	391	34	34	52	39	166	128	203	213	387	272

出典：表6に同じ

表10 各大学の合格者数の変遷

合格者数	神戸大学				東京大学				京都大学			
	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991
	2755	2675	2641	2519	3108	3088	3529	3582	2912	2907	2936	2927

  

大阪大学				名古屋大学				広島大学				岡山大学	
2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004
3447	2684	2999	2818	2230	2321	2332	2366	2429	2448	3006	3007	2381	2102

出典：表6に同じ

以上、合格者数の増減を基に議論してきたが、前々稿で述べたように、1991年から2016年までの間に大阪大学は大阪外国語大学と、神戸大学は神戸商船大学と統合している。したがって、入学定員も増加している（表10参照のこと）。これを加味して合格者数の増減を再度吟味してみよう。

表11は各年度、各地域の合格者数を当該大学の全合格者数で除した数値、すなわち当該大学の全合格者数に占める百分率である。これによって、年度ごとの全合格者数の増減の影響は除去できる。表11によると、東京大学、京都大学、名古屋大学、広島大学ともに年度間の大きな変動は各学区ともみられない。大阪大学については、第1学区と第3学区ではむしろ比率を低下させている。しかし、岡山大学への進学者は各学区ともに比率を増し、

特に第1学区ではかなり増加している。

表11 各大学の合格者数に占める比率 (%)

学区	在校生数	神戸大学				東京大学				京都大学					
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991		
第1区	51549	9.8	8.4	10.3	8.4	3.8	3.6	3.5	3.2	5.6	5.4	5.1	4.8		
第2区	42986	5.8	5.6	5.9	5.2	1.1	0.8	0.8	0.9	2.9	3.1	4.0	3.9		
第3区	26631	2.9	3.7	4.5	3.9	0.7	1.4	1.1	1.0	1.0	2.3	1.5	1.7		
第4区	23410	3.0	2.6	3.3	4.4	0.3	0.4	0.5	0.6	1.1	1.2	1.8	1.3		
第5区	4885	0.3	0.2	0.5	0.2	0.03	0.1	0.0	0.0	0.1	0.07	0.07	0.1		
学区	在校生数	大阪大学				名古屋大学				広島大学				岡山大学	
		2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004	1996	1991	2016	2004
第1区	51549	5.8	6.7	5.5	4.9	0.6	0.4	0.7	0.5	1.9	1.4	2.2	2.0	4.2	2.5
第2区	42986	4.7	4.4	3.4	4.3	0.3	0.4	0.5	0.3	1.7	0.7	0.7	1.1	1.9	1.5
第3区	26631	2.1	3.0	2.6	2.7	0.4	0.3	0.3	0.3	1.3	1.5	1.4	2.0	4.2	3.8
第4区	23410	1.8	2.2	2.7	1.9	0.08	0.3	0.6	0.5	1.5	1.4	2.1	1.9	5.2	4.6
第5区	4885	0.3	0.4	0.4	0.2	0.08	0.04	0.1	0.08	0.4	0.1	0.3	0.1	0.7	0.6

出典：表6に同じ

もちろん、比率が低下しているから絶対数において増加していても問題はないというのではない。

最後に神戸大学の数値について確認しておこう。第1学区、第2学区、第4学区、第5学区では緩やかに増加しているが、第3学区においては1996年から減少し続けている。第3学区では東京大学、京都大学、大阪大学への合格者比率が低下しているけれども、逆に岡山大学への合格者比率は増加している。絶対数の検討において確認されたことが比率においても確認されたのである。

以上、絶対数においては第1学区において大阪大学・岡山大学への合格者数が増加し、第3学区においては岡山大学への合格者数が増加している。また比率においては第3学区において岡山大学への合格者比率が増加している。当初の第4学区からの進学動向に変化があったのではないかとの予測には反する結果となったけれども、第1学区と第3学区においては近隣の大阪大学と岡山大学の二大学の影響を強く受けているのではないかとの仮説が得られた。今後は2017年度以降の動向を分析しながら、さらにこの仮説を深く検討していきたいと考える。

本学に限らず、「全国区」と言われた総合研究大学は、いずれもローカル化の傾向にあると指摘されている。最も「全国区」的性格を持つと考えられた東京大学や早稲田大学においてもローカル化の進行は指摘されている。

しかし、都道府県間のレベルだけではなくて、都道府県内のレベルにおいてもその傾向が確認されるのだとしたら、「ローカル化」の持つ意味は総合研究大学にとってより深刻なものであろう。今後、さらに、他の総合研究大学との比較研究も行いたいと考える。

## 参考文献

- 天野郁夫・河上婦志子・吉本圭一・吉田文・橋本健二(1983)「進路分化の規定要因とその変動—高校教育システムを中心として—」『東京大学教育学部紀要』第23巻、pp.1-43.
- 潮木守一・川嶋太津夫・加藤潤・伊藤彰浩・長谷川直樹・三浦真琴(1987)「18歳人口の変動にともなう大学・短大進学者および就職者の地域別推計」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第33巻、pp.318-338.
- 潮木守一(研究代表者)(1987)『教育システムの動態分析のための指標開発とデータベース作成』名古屋大学教育学部
- 潮木守一(2008)「大学進学率上昇をもたらしたのは何なのか—計量分析と経験知の間で—」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第83集、東洋館出版社、pp.5-21.
- 佐々木洋成(2006)「教育界の地域間格差」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第78集、東洋館出版社、pp.303-320.
- 友田泰正(1968)「都道府県別大学進学率格差とその規定要因」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第25集、東洋館出版社、pp.185-195.
- 朴澤泰男(2016)『高等教育機会の地域間格差—地方における高校生の大学進学行動—』東信堂
- 山内乾史(1990)「2000年における4年制大学進学者数の都道府県別・ブロック別予測」日本教育学会編『教育学研究』第57巻第2号、pp.1-12.
- 山内乾史(1991)「2000年における短大進学者数のブロック別予測」民主教育協会編『IDE・現代の高等教育』No.322、pp.56-62.
- 山内乾史(1996)「進学移動パターンの変化に関する一考察—神戸大学の研究(その1)—」『大学教育研究』第4号、神戸大学大学教育研究センター、pp.29-40.
- 山内乾史(2017)「大学進学に伴う都道府県内移動の考察(兵庫県新第5学区の事例による)—神戸大学の研究(その6)—」『大学教育研究』第25号、神戸大学大学教育推進機構、pp.23-28.
- 山内乾史(2018)「大学進学に伴う都道府県内移動の考察(その2)—神戸大学の研究(その7)—」『大学教育研究』第26号、神戸大学大学教育推進機構、pp.201-206.
- 山本眞一(1979)「大学進学希望率規定要因の分析」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第34集、東洋館出版社、pp.93-103.